

心理臨床における ノンバーバル・コミュニケーションに関する研究動向

目白大学大学院心理学研究科 青柳 宏亮
目白大学人間学部 沢崎 達夫

【要 約】

心理療法やカウンセリングをはじめとする心理臨床において、ノンバーバル・コミュニケーションの重要性は学派を越えて広く認知されている。本研究では、心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーションに関する実証的研究を、①セラピストとクライアント間のノンバーバル・コミュニケーションを構成する各要素に着目し、それぞれの影響を検討する要素還元的アプローチ、②セラピストとクライアントの相互交流そのものを研究対象とするアプローチ、に大別して概観した上で、臨床理論的研究との関連を検討し、今後の研究課題について検討を行った。

キーワード：心理療法，カウンセリング，ノンバーバル・コミュニケーション，要素還元的アプローチ，相互交流

1. はじめに

人と人の中には、言語によらないコミュニケーションが存在し、ときには、意志や感情、そのときの心理的状态を伝え合う媒体として、ときには、支持や矛盾を伝達するなど、言語的コミュニケーションを補助し、その代わり以上の重みをもつことは、誰もが認めることであろう。心理臨床の場においても、それが人間同士のかかわりを基盤とした営みである以上、言葉以前のセラピスト（以下Th.という）の雰囲気、表情、身振り、口ぶり、服装など、ノンバーバルな要素が大きな影響を与えている（吉良，1995）ことは、明白であり、Th.がノンバーバルな部分に注意することは、流派を超えてある意味で当然の常識とされている（那須田，1999）。近年、電子通信メディアを適用した心理臨床（カウンセリングや心理療法）の在り方について検討がなされてきているが、クライアント（以下Cl.という）との対面でのコミュニケーションは、依然として心理臨床における重要な要素であり、その成果に多大な影響を与えて

いる（William, Weinman, & Dale, 1998；Mead, & Bower, 2002；Haskard-Zolnierrek, & Dimatteo, 2009）。対人コミュニケーションに関するこれまでの研究は、そのほとんどが交流の言語的な側面に焦点を当てたものであった。しかし、対面での相互作用において、ノンバーバル・コミュニケーションもまた中心的な役割を果たしており、特に相互の感情や状態を伝達・受信したり、相手と関係性を築いたりするための重要な側面であることも示されている（Knapp, & Hall, 2009；青柳，2013）。カウンセリングや心理療法は、Cl.とTh.の相互作用によって成立するものであり、これまで多くの研究者や心理臨床の実践家がノンバーバル・コミュニケーションの重要性について指摘しており（Ivey, Ivey, & Simek-Downing, 1987；O'Hanlon, 1987；Neely, 1992；神田橋，1997；Frankel, Stein, & Krupat, 2003），心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーションの研究は、Th.側がどのようにすれば心理療法の効果を高めることができるかに重点が置かれてきた

といえる（那須田，1999）。

われわれは、言語、準言語、凝視、表情、動作、ジェスチャー、接触、および対人距離を含む、多くのコミュニケーション・チャンネルを通してコミュニケーションを行っている（Manusov, & Patterson, 2006）。原岡（2005）が指摘するように、コミュニケーションの最も明確な形態である言語の使用の研究から、意図や解釈がいかに重要であるかが明らかになっているが、それを超えるノンバーバル行動の有用性を示す具体的機能として、（1）情報を提供すること、（2）相互作用を規制すること、（3）親密さを表現すること、（4）社会的統制を行使すること、（5）課題の達成を促進すること、を挙げている。こうしたことから、ノンバーバル・コミュニケーションは、人間の精神的内面に深くかかわる重要な役割を果たしていると考えられ、心理臨床においてもその重要性を検討する意義は深いと考えられる。

本研究では、ノンバーバル・コミュニケーションを、対人交流場面で示される音声言語以外の表情や視線、姿勢、動作とし、それらをさまざまな角度から捉えていく。臨床的に意味をもつと想定される音声言語以外の表出を「ノンバーバル行動」とし、「ノンバーバル行動」が構成する情報伝達過程を「ノンバーバル・コミュニケーション」と定義して、心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーションに関する先行研究を実証的研究と理論的研究の視点から概観し、その動向を検討するものである。これらの研究はともに、カウンセリングや心理療法における治療過程を促進する要因の検討を主眼としているものの、研究者や臨床家の間で、注目の仕方や扱い方が異なっており、心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーションについて系統的に記述する試みは少ない。本研究では、主として欧米を中心として展開されている実証的研究を概観し、その後、臨床理論的研究との関連について述べた上で、今後の研究課題の明確化を主要な目的とする。

2. 実証的研究の概観

実証的研究の大きな流れとして、（1）Th.とCl.間のノンバーバル・コミュニケーションを構

成する各要素に着目し、それぞれの影響を検討する要素還元的アプローチ、（2）Th.とCl.間での相互交流そのものを分析するアプローチ、に大別される。以下に、それぞれのアプローチの特徴と主な研究を述べていく。

（1）ノンバーバル・コミュニケーションの要素還元的アプローチ

このアプローチは、心理臨床におけるTh.（発信者）の反応が、Cl.（受信者）に対して、どのような影響を与え、またどのような情報を伝えることになるのか、またCl.からみて、反応を通じてTh.がどのように認知されるのかといった事柄を扱うもので、ノンバーバル・コミュニケーションの各要素それぞれの影響を検討するものである。つまり、Th.側の働きかけや、それがTh.—Cl.関係に与える影響やその要因を検討することで、心理臨床の質を高めること（どのようなノンバーバル行動がカウンセリングや心理療法において効果的なのか）に主眼が置かれていると考えることができる。ここでは、心理臨床におけるノンバーバル行動に関する研究で扱われることの多い、Th.側のノンバーバル行動（視線、姿勢、うなずき、表情）に焦点を当てた臨床心理学的研究や、その他の近接領域での研究を概観した上で、本アプローチの問題点を述べていく。

〔視線〕

カウンセリングや心理療法におけるノンバーバル・コミュニケーションの研究は、ノンバーバル行動のいくつかの組み合わせの効果を検討しているものが多いが、その中で、Kelly（1978）は、カウンセリング場面での、Th.の視線の量と方向の効果について直接的に研究している。視線の方向（目と目、目と鼻・口）2条件とアイコンタクトの量（高85%、中50%、低15%）の3条件を設定し、2×3の6条件で10分間の面接を行い、研究協力者に7つの変数（心地よさcomfort、注意attention、興味interest、安楽ease、頼りなさhelpfulness、視線eye contact、振り返る意志willingness to return）についてTh.を評定させた。その結果、高レベルのアイコンタクトを示したTh.は、注

意、興味、視線の変数において、低レベルのアイコンタクトのTh.よりも評価が高くなった。また、アイコンタクトのレベルで、高・中条件に差はみられず、効果的なアイコンタクトは、必ずしもじっと見つめることではないことが示唆されている。ただし、アイコンタクトのレベルが高ければ、それだけで効果的かといえば疑問が残る。実際、アイコンタクトのもつ機能は条件によって、読み取られ方に差異が生じることが示されている。例えばTipton, & Rymer (1978) は、Cl.の考えや感情に焦点をあてる条件(Cl.焦点条件)と、問題自体に焦点をあてる条件(問題焦点条件)の2条件を設定した上で、Th.のアイコンタクトの持続時間を面接全体の5% (低群)、50% (中群)、100% (高群)の3群に分け2×3の6条件で、研究協力者によるTh.の有効性(誠実さgenuiness, 効力感competence, 自信self-confidence)を評定比較した。結果として、Cl.焦点条件群において、Th.の有効性に関する評定に差は認められなかったが、問題焦点条件群では、Th.のアイコンタクトが低・中条件の場合に、誠実さの次元で有意に低く評定された。

LaCrosse (1975) は、視線とその他のノンバーバル行動を組み合わせた表出を通じて、Th.の魅力度と説得性を研究している。男女2名ずつのTh.が、友好的・協力的と非友好的・非協力的にノンバーバル行動で振る舞うように訓練され、男女20名ずつの研究協力者が、これらのTh.のセラピー場面を観察し、魅力度と説得性について評定を行った。ここでの、友好的・協力的ノンバーバル行動とは、微笑み、うなずき、手振り、80%のアイコンタクト、肩の方向は相手に対して正面を向き、20度の前傾姿勢をとるもの指し、非友好的・非協力的ノンバーバル行動は、40%のアイコンタクト、20度の前傾姿勢をとるというものを指す。結果として、Th.と研究協力者の性別に関係なく、微笑み、うなずき、手振り、アイコンタクトを示すTh.は、そうでないTh.よりも魅力的で、説得力があると評定された。

〔姿勢〕

中村・松尾・畑山(1994)は、Th.の座位姿

勢(7条件)を呈示し、評定者によって評定される傾聴的-非傾聴的態度との関係を質問紙によって検討している。その結果、前傾姿勢が、Th.の傾聴的態度を伝達するための最も効果的な姿勢であると評定されたと報告している。また、山谷(2008)は実験によって、Th.の姿勢が印象形成に及ぼす影響を検討し、前傾姿勢がそうでない姿勢よりもTh.の肯定的な印象を高めることを示している。Smith-Hanen (1977) は、さらに詳しくTh.の腕や脚の動き、腕の位置、足・脚の位置の影響を検討している。Th.によって表出される、腕や脚の動きの有無の2条件と、腕組みや手を膝の上に置かなどの4条件、脚の組み方と足・脚の位置の対称性の6条件を設定した上で、2×4×6の48場面をVTR撮影し、それぞれの面接場面でのTh.の温かさや共感性の2次元が、研究協力者によって評定された。その結果、腕や脚の動きについては有意差がみられなかったものの、腕の位置は評定に影響を与え、腕組みは最も冷たく、共感的ではないと評定された。また、脚の位置は、腕の場合よりも複雑な効果を示した。例えば、足首を膝の上に乗せて足を組んだ場合には冷たく、共感的ではないと評定されたが、膝のところで組む場合には、そのような評定はされなかった。これに関連して、Tickle-Degnen, & Rosenthal (1992) は、腕を組んだ様子は、冷たい、拒否、受け身的と判断される一方で、適度に開いた腕は、温かさ、受容として判断されると指摘している。

〔うなずき〕

発話中のうなずきが印象形成に与える影響について、磯・木村・桜木・大坊(2003)は、ほぼ初対面の三者に、2つの会話(討論条件・親密条件)のいずれかをさせ、話題によって表出されるうなずきがどのような印象をもたらすかを検討している。その結果、うなずきはどちらの会話場面でも、会話満足度と好印象をもたらしたと報告している。

二者間での会話場面において、特に発話者が複数のトピックにまたがった語りをする場合(例: Cl.による自身の病歴に関する語り、臨床家による治療機序に関する説明など)、その話

題の受け手は、頻繁にうなずきをみせることが示されている (Schegloff, 1982)。Hall, Irish, Roter, Ehrich, & Miller (1994) は、男性医師と比較して、女性医師の方が面接中のうなずきが多く、女性患者に対してよりうなずきの頻度が高くなることを見出している。Harrigan, & Rosenthal (1983) は、治療関係を第三者が評価するという研究で、医師のうなずきの頻度が高いほど、患者とのラポールが良好であると評価しやすいことを報告しているが、Harrigan et al. (1985) の後の研究において、医師のうなずき頻度とラポール形成の間に関連性がないと結論づけている。このことから、うなずきというノンバーバル行動の要素そのものがもつ効果を検討するよりも、うなずきをコミュニケーション機能の一部として見なして検討した方がより有益ではないかという発想をもった研究がいくつかみられる。例えば、Weinberger, Greene, & Mamlin (1981) は、医療現場における医師のうなずきやジェスチャーによるノンバーバルな励まし (encouragement) 行為が、患者の治療満足度を有意に高めると報告している。同様に、Duggan & Parrott (2001) の研究によると、医師のうなずきを含んだ表情による強化 (reinforcement) によって、患者の既往歴等に関する自己開示が有意に促進されるという。医師—患者間の結果が、そのまま心理療法やカウンセリングに当てはまるとは言いにくい、ある程度の参考にはなる知見であると考えられる。

〔表情〕

廣岡・横矢 (2003) は、微笑がどのように二者間に作用し、自らが他者に対して抱く好意にどのような影響を与えるかを検討している。実験1で、二者の初対面場面を設定し、実験協力者である面接者が意図的に微笑を発し、被面接者が面接者に対して抱いた印象や好意を評定させた。また、そのときの被面接者のコミュニケーション行動をVTRで記録した。実験2では、実験1で記録された被面接者のコミュニケーション行動を実験1とは別の事件協力者に呈示し、その人物に対する印象や好意、コミュニケーション行動の認知を評定させた。その結果、

微笑は他者からよりポジティブな印象や好意を抱かれることが明らかになった。微笑みかけられた者は微笑みかけられなかった者よりも、多くの微笑みやコミュニケーション行動を行っていたことが認知され、よりポジティブな印象や好意を抱かれた。

〔要約と本アプローチの研究課題〕

以上のように、Th.の共感性、受容性、温かさ、誠実性といったTh.の伝達能力について、臨床心理学的研究やその他の近接領域の研究から、どのようなノンバーバル行動が心理臨床において適切であり有効であるかについて多くの検討がなされている。要約すると、視覚的な部分では、アイコンタクトをとること、微笑み、うなずき、前傾姿勢などが好ましいとされた。しかしながら、好ましいとされるノンバーバル行動に関して、例えば、女性は男性よりもアイコンタクトを好むという性差も報告されるなど、対象によっても受け取られ方が異なっているため、どのCl.に対しても機械的に視線を向ければよいというわけではない (Tickle-Degnen, & Rosenthal, 1992)。極端な例ではあるが、いくら微笑みが好ましいとは言え、コミュニケーションの文脈を考えずにTh.が終始微笑むことが治療関係を築くのに有効に機能しないことは、容易に想像がつくだろう。個々のノンバーバル行動の意味合いは、コミュニケーションが生じている二者の属性や関係の質、置かれている環境や状況といった背景によって変わるものであり、常に固定した意味をもつわけではない。佐治・鶴養 (1980) が述べているように、本領域の研究は、臨床的な即時性を求めるあまり、十分な検討を付す以前に具体的な個別動作をノンバーバル・コミュニケーションの一式として、状況から切り離して有意味なものとして定位しようとする傾向が強い。こう考えると、個々のノンバーバル行動のある／ないや、持続時間の長短といった側面のみを効果を検討しようとする方法は、心理臨床におけるコミュニケーションの実際にうまく当てはめられない部分もあると思われる。

心理臨床場面に限らず、対人関係は相互交流であり、メッセージの発信者と受信者が、お互

いの主観性を媒介として、反応や態度といった情報をフィードバックし合って進行していくものであり、単なるノンバーバル行動の持続時間や量といった一方向的な要因だけでは語りつくせない事象である。とりわけノンバーバル行動は、意図的に表出しているものもあるが、そのほとんどは無意図的に表出されるものであり、相互的コミュニケーションの中で誤解や齟齬、混乱が生じやすいことはよく知られている。バーバルな部分のメッセージと、ノンバーバルなメッセージの矛盾性について論じた二重拘束論(double bind theory) (Bateson, 1972) は、その一例である。

よって、最近の対人的コミュニケーションの研究は、原岡(2005)が指摘するように、コミュニケーションを、送り手と受け手の両方の相互作用として捉えることを前提としている。すなわち、コミュニケーションは一方向的ではなく、送り手と受け手が常に交代しながら円環的に進んでいくという視点である。そう考えると、Th.が、何かをしたからCl.がこうなる、という視点のみで心理臨床をみた場合、相互交流の全体像を把握しきったとはいえないのではないかと(那須田, 1999)。すなわち、コミュニケーションを成立させている各要素を取り出し、個別に分析し、その結果を統合するという要素還元的なアプローチには限界があるのではないかという意見であり非常に重要な指摘と思われる。カウンセリングや心理療法でTh.が対象とするものは、Cl.の主観性や個別性をもった内面である。よって、科学的に厳密であってもCl.の内面に迫れないアプローチではあまり意味がなく、ノンバーバル・コミュニケーションの客観性や正確さよりも、ノンバーバル行動がCl.の主観的な見方に彩られた上でどのように作用しているかの方がより重要な問題である(那須田, 1999)。概観してきた研究は、実験を主にしており、当然のこととして「その場の自然さ」が、研究上の問題として指摘されるところであるが、相互交流の視点をもたずにノンバーバル行動のみを扱うことは、実際の心理臨床実践から大きく逸脱することが懸念される。

その中で、「交流それ自体を分析の単位とみなす、交流の身体的側面に対するより複雑で関

係的なアプローチが、プロセスのよりよい理解のために必要である」(Bernieri, 1988)という意見に代表される相互交流自体に着目するアプローチがある。しかし、相互作用が生起する関係性をどのように押さえるかは常に難しい問題(鯨岡, 2005)であり、Th.—Cl.の相互交流を扱った臨床心理学的研究は非常に少ないのが現状である。

(2) 相互交流そのものを研究対象とするアプローチ

コミュニケーション場面において、相互交流者のノンバーバル行動、例えば話し方や姿勢や癖などが、互いに類似する、或いは身体動作が同期して起こる同調行動(behavior matching)がしばしば観察される(大坊, 1999)。この現象は、コミュニケーション場面において常に示されるわけではなく、相互交流者の共感性や社会性などの要因により変化することから、同調行動は多くの研究者によって、円滑なコミュニケーションの指標としてみなされ、さらにはラポールをもたらしたり、ポジティブな対人印象をもたらしたりすることが示されている(長岡, 2006)。

他者の表情刺激を見せられた実験参加者がその表情と同じ表情を作るための顔面筋の電位反応を示すこと(Dimberg & Lundqvist, 1988; Hess, Philippot, & Blairy, 1998)や、情緒的な音声表現(例えば幸福や悲しみなどの情動を表出するスピーチ音声)を聞いた実験参加者がそのスピーチが表出したのと同じ情動を表出するような話し方をすること(Neumann & Strack, 2000)、また、生後直後から観察される新生児による大人の舌だしや口の開閉の模倣(Condon & Sander, 1974; Melzoff & Moore, 1977)は、mimicryと呼ばれている(Hess, Philippot, & Blairy, 1998)。この現象は、われわれが、他者のノンバーバル行動(顔の表情や音声、姿勢、動き)に同調することによって、相手の内的状態と同じ状態を体験し、相手の内面を理解する上での手がかりとしているという示唆を与えてくれる。

心理臨床におけるカウンセリングや心理療法においても、その過程においてTh.とCl.の姿勢

が互いに一致することが観察されており、この現象はcongruence, mirroring, posture sharingと呼ばれる (Schefflen, 1964; LaFrance, 1979)。長岡 (2006) によると、心理臨床における相互交流で生起する同調がもたらす影響として、①相互交流相手の内面理解を促進すること、②共感性を伝達しラポール形成すること、③話者の性格や態度をポジティブに感じさせることが挙げられる。Cl.の内的理解と共感の伝達は、心理療法やカウンセリングにおいて欠くことのできない重要な要素である。

Maurer & Tindall (1983) は、Th.がCl.の姿勢 (手・足の位置) を真似た場合、そうでない場合に比べてTh.の共感性に関する評価を有意に高めることを実験的に示している。また、Bernieri (1988) は、高校生と教師役の二者間で、動きの同調性の程度を測定し、測定者間の動きの同調の評定と参加者のラポール形成に強い相関を見出した。また青柳 (2013) は、Th.がCl.の行動を鏡写しのように真似るミラーリング (mirroring) を行った群が、行わなかった群に比べて、Cl.がよりTh.からの共感を認知しやすくなり、かつラポール形成につながるポジティブな印象をもたらすと報告している。また別の側面として、Nagaoka, Komori, Nakamura, & Dragna (2005) は、互いに意見の異なる二者の対話において、両話者が相手に対して受容的構えをもち、相手と妥協点を見出そうとする場合において、二者の反応潜時 (話者交替の際の、相手が話し終わってから自らが話し始めるまでの時間間隔) の時間長が互いに一致するが、両話者が互いに自らの意見を主張する場合には、同調性が観察されないことが示されている。O' Hanlon (1987) によれば、Erickson, M.H. は mirroring を用いて、通常は治療で扱いづらいと考えられるようなクライアントと即座にラポールを形成してしまったと述べており、このことから、相手のノンバーバル行動に波長を合わせていくことがラポールの形成に役立つとみる考え方は強い。

〔要約と本アプローチの研究課題〕

以上から、ノンバーバル行動の同調性は、心理臨床に密接に関係する受容性や共感性、ラポ

ール形成に深く関係することが示されている。よって、心理臨床におけるTh.—Cl.間での相互作用を研究対象とする場合、こうした同調行動 (behavior matching) を軸に検討していくことは意義深いと思われる。同調行動は、表情や姿勢、癖、身体動作といった行動面から、それが生起する状況など多様な要因の影響を受けるため、相手との関係を情緒的、社会的認知などの広い角度から映し出される、交互交流の副産物といえるかもしれない (長岡, 2006)。同調行動という現象を、相互交流者が同調傾向を感じとり、相手との関係の指標としてモニターすることができれば、コミュニケーションをより効果的に円滑に進めていくための技能として体系化できる可能性を示唆している。

しかし一方で、上記のように同調行動と共感性あるいはラポール形成との間に何らかの関連を示唆する研究はいくつか見られるが、その関係を実証したもの自体が少ないという現状がある。しかも、数少ない実証研究においても、用いられる同調行動は本体の同調行動のような「無意図的に」発生するものではなく、実験者の方で「意図的に」生じさせているものである。そのため、意図的に生じさせた同調行動による実験的研究結果をそのまま臨床実践に適用できるかについて議論の余地が残されている。

3. 理論的研究の概観

心理療法過程における治療の変化を促進する要因として、Th.が語る内容、語り方以上に、相互交流を通してCl.に伝わるTh.の感性、姿勢、意図、思いが非常に重要であり、相互交流のプロセスをめぐる理解の重要性がますます強調されてきている (森, 2010)。

Minuchin (1974) は、構造派家族療法におけるシステムズ・アプローチにおいてジョイニングの重要性を示している。ジョイニングは、家族システムへの関与観察的技法であるが、Th.が家族のサブメンバーとして家族システムに溶け込むために、家族成員の言葉遣い、仕草、感情表現などのノンバーバル行動を取り入れる作業を指しており、家族療法の分野において、Th.—Cl.間でのノンバーバルな相互交流が明確に重要視されている。

精神分析の分野でも、Th.—Cl.間での相互交流を重視する流れと移行してきている。Freud Sが精神分析を創始して以来、精神分析のアプローチは、知的プロセスを重視し、解釈を通して得られる知的洞察によってCl.の治癒がもたらされると考えられており（森, 2010/2011）、ノンバーバル・コミュニケーションの役割は長い間過小評価されてきた（Beebe, Knoblauch, Rustin, & Sorter, 2005 丸田監訳 2008）。臨床場面におけるCl.のノンバーバル行動に注意が向けられ始めたのは、1950年代に入ってからであり、Feldman（1959）は、セラピーにおけるジェスチャーや身振り、しゃべり方の癖の重要性を取り上げた。その後、VTR記録、録音といった観察技術の発展に伴い、Schefflen（1963）などの研究者たちは、Th.とCl.のノンバーバルな交流がセラピーにおいて果たす重要な役割を示した。こうした研究により、ノンバーバル行動がいかに相互交流的であるかが強調され、いかにそれが言語的やりとりを区切り、調整し、増幅するかが示されていった。この流れは後述するように、後の乳児—母親の観察的研究から得られることになる所見、そして、Th.とCl.の両方に起こってくるエナクトメントをめぐる今日的関心の先鞭をつけることとなる（Beebe et al., 2005 丸田監訳 2008）。それ以降、Kohut（1977）による自己心理学からの提言や、Stern（1985）の乳児—母親の観察的研究から発展した乳幼児精神医学からの還元、Stolorow, Brandchaft, & Atwood（1987）による間主観性理論の展開によって、Th.—Cl.間での相互交流の中で生起する各々の情動や主観的体験の重要性が強調され、精神分析的アプローチが解釈や洞察といった知的側面にとどまらず、相互交流という情緒的側面に積極的意義を見出す流れが生まれてきている。

Kohutは、Cl.の治癒要因として知的洞察ではなく、発達初期における発達促進的な情緒的体験（Kohut, 1977）に注目し、Th.—Cl.間での相互交流の臨床的意義を見出している。Stern（1985）は、乳幼児と母親の母子相互交流の中で、間主観的ななかかわり合いにおける情動調律という概念を提唱し、話し方、表情、目つき、身体の動かし方など、ノンバーバルかつ情緒的

な重層的コミュニケーションによって伝達され合う、言葉にされない内的な主観的体験の共有による心的親密性の重要性を述べている。このSternの見解を心理臨床に応用する観点として、「共にある」調律（森, 2010）が挙げられる。これは、母親が乳児の主観的体験を共有するために、乳児の内的状態に合わせるようなかわりをするのと同様に、Th.がCl.のそのままの情動状態を細やかに読み取り、そしてそこに参加し、その状態を共有しようとする姿勢を指している。また、間主観性という観点から、Stolorow, et al.（1987）は、精神分析を2つの主観性（Th.の主観性とCl.の主観性）の交差が構成する特定の心理的な場で起こる現象を解明する作業であると仮定した。つまり、「精神分析は、観察者の主観的世界と被観察者のそれという、それぞれ別個に形成された2つの主観的世界の相互作用に焦点を当てる、間主観性の科学であり、その観察の姿勢は常に、観察の対象となる間主観的な場の内側にあり、外側にはない」（Stolorow & Atwood, 1987 丸田訳 1995）としている。同様にOrange（2002）も、Th.とCl.との関係性を把握する際に、その関係性の外側に出ることは不可能であるという臨床的現実を踏まえ、相互交流の内側で生じる文脈（context）という視点で理解しようとする間主観性理論を展開している。このように、Th./Cl.という個別的な枠組みを越えた関係性の中で生じていることを扱う立場では、相互交流において言語的に表現できる領域だけではなく、分割しがたいノンバーバルな領域にも注目が集まっているといえる。

〔要約と研究課題〕

以上のように、心理臨床の理論的研究においても、Th.—Cl.間での相互交流が重視される傾向が見て取れる。心理療法やカウンセリングにおける治療過程において、第三者から容易に判別できないCl.に伝達される言葉以上の“何か”が注目を集めているといえ、そう考えると、理論的研究と実証的研究は同列の流れにあると考えられる。

乳児の心や、誕生直後からの母親と子どもとの間に起こっている複雑なコミュニケーション

に関する研究は、人の心理的対話の起源の理解にとって画期的な貢献を果たしてきたと考えられるが、心理臨床実践に視点を移したときに、どの程度の妥当性をもつかが疑問点として挙げられる。実際、古典的なトレーニングを受けた精神分析家の中には、ノンバーバル行動を付随的なものとししか考えない者もあり、また、Th.とCl.間のノンバーバルなやりとりがこれまで研究の中心になってこなかったのは、言語的材料に比べて重要度が低く、しかもそれを通して得られる情報が、興味はもてるものの、Cl.を理解する上で不可欠とはいえないからに他ならない、という主張もある (Beebe & Lachmann, 2002)。そう考えると、子どもや大人のカウンセリングや心理療法において、ノンバーバル行動は、Th.とCl.が言語化するものかどうかとどう関連するのか、そしてそれがどの程度の情報を伝えることになるのかは、今後検討されるべき事項であると考えられる。また、この領域における発達心理学的研究として、発達そのものがノンバーバル・コミュニケーションに与える影響について、すなわち、乳児期から成人期にかけて、ノンバーバル・コミュニケーションがどのような変化を受けるのか、あるいは変化を受けないのかを検討していくことも重要であると思われる。例えば、ノンバーバル行動が思春期において気分や態度、同一性、信念、葛藤を表すための主要な方法であることが示唆されているが (Beebe & Lachmann, 2002)、ノンバーバル行動を発達的に研究することにより、ノンバーバル・コミュニケーションが心理臨床場面において果たす役割、とりわけ治療作用や治療プロセスの問題についての示唆を得られるのではないかと考えられる。

4. 結語

人と人との情動交流がとりわけ浮き彫りになる臨床例が報告されるとき、一般には実際の言葉によるやりとりの変遷が前景となりがちである (森, 2010)。しかし、そこで報告されない言葉以外の交流は、治療関係や治療プロセスを検討する上で重要な要素のはずであり、言葉と共にノンバーバルな要素と一緒に検討してこそ、そこで得られる臨床的知見は活きたものになる

と思われる。

本研究では、心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーションに関する実証的研究の動向から、Th.とCl.間のノンバーバル・コミュニケーションを構成する各要素に着目しそれぞれの影響を検討する要素還元的アプローチと、Th.とCl.間での相互交流そのものを研究対象とするアプローチの2つ流れを概観した。要素還元的アプローチの視点から、Th.側がどのようにしたら心理臨床的に効果的な交流が生じるかという、実践スキルに関する問題の重要性は今後も変わらないと思われ、知見の蓄積が望まれる (1999, 那須田・山谷, 2008; 長屋・永田・深津, 2009; 中谷・待田・東, 2012; 青柳, 2013)。一方で、実証的研究の方法論的困難さが想定されるものの、相互交流自体を研究・検討する意義は増しつつあると考えられる。臨床理論研究においても、個々のノンバーバル行動の客観的な意味や量、内容などよりも、主観的意味合いや質が問われてきており、相互交流が重視される傾向が読み取れる。その中で、情動調律の概念や間主観的アプローチを切り口に、ノンバーバルな領域に注目が集まっている。森 (2011) が述べているように、心理臨床における相互交流の検討は、Th.の語る内容、語り方以上といった〈何をいかに伝えるか〉という方向性から、言葉にならないノンバーバルな領域に目を向けた〈何がいかに伝わるか〉という方向性への転換を示しているとも考えられる。

心理臨床においては、Th.とCl.の関係の中で、単に言語的なコミュニケーションが成立しているということ以上のものが必要であると考えられる。Cl.の望ましい変化をもたらす上で非常に重要な役割を担うのが、Th.とCl.の関係性である (氏原, 2002)。ここでの関係性とは、相互作用相手との間に心理的に感じられる関係であり、夫婦関係、親子関係のように比較的長期にわたって一定しているものというより、相互作用の中で刻々と変化し、相互作用者の発話や動作といった微細な変化に影響を受けやすいとともに、相互作用者の次の振る舞いを規定する要因にもなるという性質をもっている (Duck & Sants, 1983; Planalp & Rivers, 1996)。よって、カウンセリングや心理療法の過程とCl.の

変化のメカニズムは、あらかじめ決まった技法とそれへの反応という決定論的・直線的な思考でとらえることはできない (The Boston Change Process Study Group, 2007)。こうした関係性において、言葉による交流の背景に漂う、言葉にしがたい部分を担うのがノンバーバル・コミュニケーションであり、前述のような知見が蓄積されてきている。

ノンバーバル・コミュニケーションの要素還元的アプローチの観点から、Th.⇒Cl.という方向性を考えた場合には、Th.のノンバーバル行動送信能力の優劣がカウンセリングや心理療法のプロセスに与える影響が注目されることとなる。すなわち、Th.のどんなノンバーバル行動がTh.に対する安心感や安全感、治療満足度といった肯定的感情を高める要因となるかを検討するものである。反対に、Cl.⇒Th.という方向性を考えた場合、Th.によるCl.のノンバーバル行動の読み取り能力の影響が注目されることとなる。ある種の病理性をもったCl.は、特有のノンバーバル行動を多く示すことが明らかになっているが (Duggan, & Parrott, 2001)、専門的なアセスメントの材料として、Cl.からTh.に向けられるノンバーバル行動を扱う意義は大きいと考えられる。また、記述的研究で注目されるポイントであるが、「セラピーの重要な局面を迎えた段階で、Cl.が生き活きとした声で語り、Th.に対して強い絆を示すような感情を言葉以外で伝えてくることがある」(河合, 2010) というように、一般的なノンバーバル行動の読み取りとは別次元でのCl.特有のノンバーバル行動の読み取り能力の重要性も示されている。

また、Th.とCl.のノンバーバル・コミュニケーションの相互交流性を考慮して関係性を検討する場合、ノンバーバル行動の同調性が有効な指標となり得ることが先行研究で示されている。前述の実証的研究で示されたように、ノンバーバル行動の同調性は、心理臨床に欠かせない要素である受容性や共感性に深く影響を与えている。実際、カウンセリングの事例研究においても、ノンバーバル行動の同調性が生じることが繰り返し報告されており (Schefflen, 1964; Harrigan, & Rothental, 1986; O'Hanlon, 1987)、同調性がカウンセリングの質と関係す

ることが示されてきた。

以上を踏まえ、今後の研究の方向性として、心理臨床における複雑なコミュニケーションプロセスの中で、ノンバーバルな交流が果たしている役割を、要素還元的なアプローチのみならず、交流が生起する関係性そのものに着目した包括的な研究が必要であると思われる。実証的研究の方向性として、例えば、心理臨床での対面的コミュニケーションで生起する同調性の、重層的視点からの定量化が挙げられる。具体的には、心理面接の時間経過に沿って、いつ、どのコミュニケーション・チャンネルが同調を示すのかを定量的・時系列的に検討することや、心理面接内での言語内容とノンバーバル行動の同調傾向との関連について検討することも重要になると考えられる。

謝辞

本論文の執筆に際してご助言を賜りました、目白大学人間学部丹明彦准教授に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 青柳宏亮. (2013). 心理臨床場面でのノンバーバル・スキルに関する実験的検討：カウンセラーのミラーリングが共感の認知に与える影響について. *カウンセリング研究*, **46**, 83-90.
- Beebe, B., Knoblauch, S., Rustin, J., & Sorter, S. (2005). *Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment*. Other Press; New York. (丸田俊彦 (監訳) (2008) 乳幼児研究から大人の精神療法へ 岩崎学術出版)
- Beebe, B. & Lachmann, F.M. (2002). *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions*. The Analytic Press: Hillsdale, N.J.
- Bernieri, F.J. (1988). Coordinating movement and rapport in teacher student interactions. *Journal of Nonverbal Behavior*, **12**, 120-138.
- The Boston Change Process Study Group (2007). The fundamental level of psychodynamic meaning: Implicit process in relation to conflict, defense and the dynamic unconscious. *International Journal of Psychoanalysis*, **88**, 843-860
- Condon, W.S. & Sander, L.S. (1974). Neonate movement is synchronized with adult speech:

- Interactional participation and language acquisition. *Science*, **183**, 99-101.
- 大坊郁夫. (1999). 同調傾向. 著: 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編), 心理学辞典. 有斐閣.
- Dimberg, U. & Lundqvist, L.O. (1988). Facial reaction to facial expression: Sex differences. *Psychophysiology*, **25**, 442-443
- Duck, S.W., & Sants, H.K.A. (1983). On the origin of the specious: Are personal relationships really interpersonal states? *Journal of Social and Clinical Psychology*, **1**, 27-41.
- Duggan, A.P. & Parrott, R.L. (2001). Physicians' nonverbal rapport building and patients' talk about the subjective component of illness. *Human Communication Research*, **27**, 299-311.
- Frankel, R.M., & Stein, T., Krupat, E. (2003). *The Four Habits approach to effective clinical communication: Physician education and development*. Oakland, CA: Kaiser Permanente.
- Hall, J.A., Irish, J.T., Roter, D.L., Ehrlich, C.M. & Miller, L.H. (1994). Gender in medical encounter: An analysis of physician and patient communication in a primary care setting. *Health Psychology*, **13**, 384-392.
- 原岡一馬. (2005). 対人的コミュニケーション: 主な領域と研究の方向. 久留米大学心理学研究, **4**, 1-26.
- Harrigan, J.A. & Rothenthal, R. (1983). Physicians' head and body positions as determinants of perceived rapport. *Journal of Applied Social Psychology*, **13**, 469-509.
- Harrigan, J.A. & Rothenthal, R. (1986). Nonverbal aspects of empathy and rapport in physician-patient interaction. In P.D. Blanck, R.Buck, & R.Rothenthal (Eds.) *Nonverbal communication in the clinical context* (pp. 36-73). University Park: The Pennsylvania University Press.
- Haskard-Zolnieriek, K., DiMatteo, M.R. (2009). Physician and patient adherence to treatment: a meta-analysis. *Med Care*, **47**, 26-34.
- Hess, U., Philippot, P. & Blairy, S. (1998). Facial resction to emotional facial expressions: Affect or cognition? *Cognition and Emotion*, **12**, 293-313
- Hess, U., Philippot, P., & Blairy, S. (1999). Mimicry: Facts and Finction. In P. Philippot, R.S. Feleman, & E.J. Coats (Eds.) *The Social Context of Nonverbal Behavior* (pp.213-241). New York: Cambridge University Press.
- 廣岡秀一・横矢規. (2003). 対人コミュニケーションにおける予言の自己実現: 自らの微笑みが相手に対する好意に及ぼす効果. 三重大学教育学部研究紀要, **54**, 131-144.
- 磯友輝子・木村昌紀・桜木亜希子・大坊郁夫. (2003). 発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響: 第三者会話場面における非言語行動の果たす役割. 信学技法, **25**, 31-40.
- Ivey, A.E., Ivey, M.B. & Simek-Downing, L. (1987). *Counseling and psychothrapy: Integrating skills, theory, and, practice*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall
- 神田橋條治. (1997). 初心者への手引き 花クリニック神田橋研究会
- Kelly, E. (1978). Effect of counselor's eye contact on student-client's perceptions. *Perceptual and Motor Skills*, **46**, 627-632.
- 吉良安之. (1995). 心理臨床における表情. 心理臨床, **8**, 232-236.
- Knapp, M.L., Hall, J.A. (2009). *Nonberval communication in human interaction*, 7th ed. Boston, MA: Wadsworth: Cengage Learning.
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International University Press.
- 鯨岡峻. (2007). 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房.
- LaCrosse, M. (1975). Nonberval behavior and perceived counselor attractiveness and persuasiveness. *Journal Counseling Psychology*, **22**, 563-566.
- LaFrance, M. (1979). Nonverbal synchrony and rapport: analysis by the cross-lag panel technique. *Social Psychology Quarterly*, **42**, 66-70
- Manusov, V., & Patterson, M.L. (2006). *The SAGE handbook of nonverbal communication*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Maurer, R.E. & Tindall, J. F. (1983). Effect of postural congruence on client's perception of counselor empathy. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 158-163
- Mead, N. & Bower, P. (2002). Patient-centered consultations and outcomes in primary care: a review of the literature. *Patient Educ Couns*, **48**, 51-61.
- Melzoff, A.N. & Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, **198**, 75-78

- Minuchin, S. (1974). *Families & family therapy*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- (山根常男 (監訳) (1984). 家族と家族療法 誠信書房)
- 森さち子. (2010). かかわり合いの心理臨床：体験すること・言葉にすることの精神分析. 誠信書房.
- 森さち子. (2011). 精神分析的な心理療法における相互交流プロセス：情緒交流が途絶えた関係からの回復をめぐる. 心理臨床学研究, **29**(2), 141-152.
- 長岡千賀. (2006). 対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者相互影響に関する研究 対人社会心理学研究, **6**, 101-112
- Nagaoka, C., Komori, M., Nakamura, T., & Draguna, M. R. (2005). Effects of receptive listening on the congruence of speakers' response latencies in dialogues. *Psychological Reports*, **97**, 265-274.
- 長屋佐和子・永田法子・深津千賀子. (2009). 心理臨床面接における言語的・非言語的情報の読み取りに関する基礎的研究：研究構想の概要. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **8**(2), 17-24.
- 中村昭之・松尾典義・畑山美恵子. (1994). 心理臨床場面におけるノンバーバル行動：カウンセラーの姿勢がクライアントに与える影響について. 駒沢社会科学研究, **26**, 129-140.
- 中谷恵子・待田昌二・東豊. (2012). 心理臨床場面におけるセラピストの非言語行動の定量化：カウンセリング実習における面接評価との関連. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇, **1**, 45-60.
- 那須田律子. (1999). 心理臨床場面における非言語コミュニケーション研究の動向. 人間文化研究科年報, **15**, 187-198.
- Neumann, R. & Strack, F. (2000). "Mood contagion": The automatic transfer of mood between persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 211-223
- O'Hanlon, W. H. (1987). *TAPROOTS: Underlying Principles of Milton Erickson's Therapy and Hypnosis*. W.W.Norton & Company, Inc. (森俊夫・菊池安希子 (監訳) (1995) ミルトン・エリクソン入門 金剛出版)
- Orange, D.M. (2002). There is no outside: Empathy and authenticity in psychoanalytic process. *Psychoanalytic Psychology*, **19**, 686-700.
- Planalp, S., & Rivers, M. (1996). Changes in knowledge of close relationships. In G. Fletcher & J. Fitness (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach*. (pp. 299-324). Mahwah: Erlbaum.
- 佐治守夫・鶴養美昭. (1980) カウンセリングに関する実験的検討 (I): 非言語的観点から 東京大学教育学部紀要, **19**, 1-14.
- Stolorow, R.D., Brandchaft, B., & Atwood, G.E. (1987) *Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach*. Hillsdale, NJ.: The Analytic Press. (丸田俊彦 (訳) (1995). 間主観的アプローチ：コフォートの自己心理学を越えて. 岩波学術出版社)
- Stern, D. N. (1985) *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books. (小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989・1991) 乳児の対人世界：理論編・臨床編. 岩波学術出版)
- Schefflen, A.E. (1964). The significance of posture in communication system. *Psychiatry*, **27**, 316-331.
- Schegloff, E. (1982). Discourse as an interactional achievement: Some uses of "uh-huh" and other things that come between sentences. In D. Tannen, *Analyzing discourse: Text and Talk* (pp.71-93). Washington, DC: Georgetown University Press.
- Smith-Hanen, S. (1977). Effects of nonbervel behaviors on judged levels of counselor warmth and empath. *Journal of Counseling Psychology*, **24**, 87-91.
- Tickle-Degnen, L. & Rothental, R. (1992). Nonbervel aspects of therapeutic rapport. In R. Feldman, *Application of nonbervel behavioral theories and research* (pp.143-164). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Tipton, R.M. & Rymer, R.A. (1978). A laboratory study of the effect of varying levels of counselor eye contact on client-focused and problem-focused counseling styles. *Journal of Counseling Psychology*, **25**, 200-204.
- 氏原寛. (2002). カウンセラーは何をするのか：その能動性と受動性. 創元社
- Weinberger, M., Greene, J.Y. & Mamlin, J.J. (1981). The impact of clinical encounter events on patient and physician satisfaction. *Social Science & Medicine*, **15E**, 239-244.
- Williams, S., & Weinman, J., Dale, J. (1998). Doctor-patient communication and patient satisfaction: a review. *Fam Pract*, **15**, 80-92.

山谷奈緒子. (2008). 話し手の姿勢とあいづちが対人認知に及ぼす影響：カウンセリング場面を想定した実験的検討. 人間福祉研究, **11**, 171-186.

—2016年9.23.受稿, 2016年11.2.受理—

A review of the studies on non-verbal communication in psychotherapy and counseling

Kousuke Aoyagi Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki Mejiro University, Faculty of Human Science

Mejiro Journal of Psychology, 2017 vol.13

【Abstract】

It is generally acknowledged that nonverbal-communication plays an important role in psychotherapy and counseling. This article reviews non-verbal communication studies in terms of psychotherapy and counseling. Empirical studies can be categorized into two groups according to their orientation; one is “reductionism approach”, to focus on each of the elements that make up the non-verbal communication between a therapist and a client, to examine each of the impact. The other is “approach to study the interaction”, in which non-verbal interaction are considered as an unit of analysis. Empirical studies in both orientations are reviewed. Finding from these studies are discussed in relation to the concepts derived from descriptive studies of non-verbal communications.

keywords : psychotherapy, counseling, non-verbal communication, reductionism approach, interaction